

「おはようございます」と明るく会釈する。大分県別府港にあるヨットハーバーには真っ黒に日焼けした子供たちの活気ある声が響く。小中学生を対象としたヨット大会開催のため先日、別府市を訪れた。90人の子供たちを前に開会式が行われ、そのなかで中学2年女子選手の神島朝恵さんが表彰を受けた。

1月に山口県光市で行われたヨット大会レース中、小学5年の男子選手がバランスを崩し凍える冷たさの海に投げ出された。自らもレース中だった神島さんが遠くで浮かぶ選手に気づき、失格を覚悟でコースを離れ人命救助をしたことが表彰につながった。神島さんは「海に浮いている選手が見えたので、こ

のままたと命が危ないし、事故に遭つてもいい。誰もいなかったら助けたらいいと思つた」と当時の様子を振り返る。子供の自然体験の重要性が説かれていたが、その機会は年々減少傾向にある。大人の体験不足による理解の欠如や安全面を考慮し過ぎる姿勢など原因はさまさまだ。子供の意思は大人から反映されることも多く、自然と触れ合う機会を減らしてしまえば興味や関心を示すことはなくなる。子供が健やかに育つためには机上で学ぶことができない自然体験は不可欠だ。子供を取り巻く環境が大きく変化している。家庭や学校だけでなく、教育は地域も

子供たちの自然体験支えたい

B & G 財団専務理事 菅原悟志



〈すがわら・さとし〉大正大学客員教授。日本ゲートボール連合理事。海事科学振興財団（船の科学館）監事。

一体となって支えることはいままでもない。その役割の一端を担うのがB & G海洋クラブだ。全国に280超ある海洋クラブではヨットやカヌーなど海洋性レクリエーションを通じた自然体験により集団生活のなかで挨拶やマナー、規律を身につけさせ子供教育には欠かせない「徳育」に力点を置いた青少年の健全育成活動を行っている。それを支えるのが指導者と呼ばれる地域のボランティアだ。

ランティアとして20年にわたりヨットの指導を続ける濱本さんは人命が第一とクラブで言い聞かせてきた。

子供たちはレースに勝つため日々自分自身と戦いながら厳しい練習を積み大会に挑む。だが「選手として成長する前に、まず人として成長させる」。これが全国の指導者に共通する教育方針である。ヨットでつらいことは「完走」できなかつた時と答える神島さんが、自然の怖

■ 麻 乱 答 解 ■

子供はひとたび水上に出れば誰の助けも借りることができず孤独だ。風や波が行く手を遮り思い通りにならない。この体験が感性を刺激し、自然にうまく向き合うために問題の発見と解決する力が養われる。また同じ苦しみを味わい、ともに乗り越えた仲間とのコミュニケーションを豊かにし、相手を思いやる気持ちがおのずと芽生える。

成長に大きな影響を与えるのが海洋クラブの指導者である。別府海洋クラブ所属の神島さんを2年前から指導する濱本徹夫さん(57)は別府市の職員だ。「朝服はかつて海で危険な目に遭った経験からレースを捨てても助けるに行つた」と話す。ボ

さを身をもって体験したからこそ見て見ぬふりはできなかった。「失格しても次の大会で頑張ればいい」と笑顔で語る13歳の姿を見ると、心が温まる。

子供の成長は待ったなしだ。多様な能力が潜んでいる子供の良さを引き出し伸ばす責任を負うのが大人の役目であり、それには自然体験が適当であることは疑いがない。今後地域におけるクラブの存在はさらに高まるだろう。ボランティアを続けることは決してたやすいことではない。だが子供の未来を願う、多くの人に支えられ今の自分がある。その気持ちをもち続けこの夏も指導者たちは各地で活動している。